
ハヤテのごとく！ 生徒会長の憂鬱

ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！ 生徒会長の憂鬱

【Nコード】

N0402T

【作者名】

ユウ

【あらすじ】

ある日の昼休み

昼食を食べ終えた白皇の生徒会長のヒナギクは衝撃の事実を知るのであつた・・・

（前書き）

ハヤテSSの初投稿

基本は原作準拠

今回はヒナギク視点です

麗らかな昼下がり。

お弁当を食べ終えた私は脇に置いた紙パックのジュースに注したストローを唇で挟む。

「あー、ヒマだなあ・・・」

ベンチに座ったまま、ぐーっと体を伸ばす。

今日は生徒会はお休み。そんな日の昼休みはこんな風に時間を持て余してしまう。

「ていうか白皇の昼休みが長すぎなのよ」

白皇の昼休みは普通の学校に比べてかなり長い。

やたら動きの遅いお嬢様や昼食に豪華なランチをお食べになるお坊ちゃまがたくさんいる所為である。

「会長こんにちは」

「こんにちは」

女子生徒が人気の少ないこの場所を通り過ぎて行く。

ただっ広い敷地の一般的な感覚で表現するなら多分裏庭というような場所を通る人は少ない。

静かで落ち着いているから私は割とここで過ごす。

お弁当余っちゃったな・・・

紙パックの隣に置いた包みを見やる。

雪路に差し入れてあげようと思ったのだが、薫先生が頑張っているようだったので今日のところは引き下がっておいた。

よって雪路にあげるつもりだったお弁当はお役御免となってしまうた。

勿体ないけど食べるわけにはいかないしなあ・・・

完璧超人ヒナギクだって一女子高校生。身体の重みだとかなんとかを気にしたりするお年頃なのだ。

誰かにあげるか・・・

『マリアの作ったお弁当は美味いな。なんだヒナギク、お前の弁当か？やけにでかいな』

ナギはマリアさんのお弁当があるだろうし・・・

『おうヒナ、ファミレスに行かないか？』

美希達は高級品しか食べないか・・・

『あらー、ドカベンね』

愛歌さんはいろいろと怖い。

『桂さん！？ばば僕がお弁当貰ってもいいんですか！？』

東宮君は・・・うん、無理。

・・・あれー、もう終わり？私友達少くない？

衝撃の事実に二年生になって気づいたヒナギク。

まあ分かっていたことではある。

成績優秀にして運動神経抜群。おまけに八方美人の生徒会長と来れば簡単に友達になろうと思う人は少ないはずだ。

私だってそう思う。

さつきみたいに声をかけてくれる生徒は多いけれど、その後に発展する人は皆無。

・・・あー切なくなってきた。

少し目が涙っぱいきがする。

私だってみんなと仲良くしたいわよ・・・

ベンチに体育座りで縮こまる。

「どうしたんですか、ヒナギクさん？」

ああ、この声。この声だ。

あなたは名前を呼ばなくても来てくれるのね。

「具合悪いんですか？」

「ごめん、大丈夫よ。ハヤテ君」

顔をあげて、愛しい彼の顔を目に入れる。

「本当ですか？無理しちゃ駄目ですよヒナギクさん」

「大丈夫だってば。心配性ね、ハヤテ君は」

「だったらいいですけど・・・」

「隣座る？」

お弁当と紙パックを反対側にどけて、少し詰めてからハヤテ君が座れるようにスペースを作る。

「じゃあ失礼しますね」

ハヤテ君が隣に座る。フローラルのいい香りが香ってくる。

いい匂い過ぎだろ、女子か・・・

「ふう・・・あ、ご飯食べていいですか」

片手に持ったビニール袋を胸の前に持ち上げる。

「ええ、構わないわよ」

「そうですか、じゃあ頂きます」

彼は丁寧な手を合わせてから袋の中のサンドイッチを取り出す。

「またそんなものばかり。身体壊すわよ？」

「はは、三ヶ月間野草だけで生きてたこともありますし炭水化物があればもうブルジョワ級ですよ」

あっけからんとヘビーなことを言ってくれる。私だってそんな物凄い食生活は体験したことないわよ・・・
ってそうか、私にはお姉ちゃんがいたんだった。

ハヤテ君の両親は人間の最底辺。お兄さんは放浪癖があつたんだからずっと一人の力で生きてきたんだろう。

「あ、お弁当要る？余り物だけど」

ハヤテ君にお弁当を差し出す。

「え・・・お弁当・・・ですか・・・？」

あまり乗り気ではないらしい。私の弁当は食えないってか。

「なに？私のお弁当は食べれない？」

心の中で思ったことをそのまま口にする。

「いや、そのなんというか・・・毒が盛ってあるとか・・・？」

「バカにしてる？」

「いや、いやいやそんなことは無いです全然！」

「はあ、お姉ちゃんにあげるつもりのお弁当だから大丈夫よ」

「それはそれで大丈夫なんですか？」

「どういう意味？」

「い、いただきまーすっ・・・」

彼は素早く弁当箱の蓋を開けてしゃかりきに食べ始める。

「わぁ、すっごくおいしいですよヒナギクさん」

「毒は盛ってないけどね」

「そんなに言わないで下さいよ」

そう喋りつつ美味しそうにおかずを口に運ぶ。

「でも本当に美味しいですよ」

「ハヤテ君には負けちゃいますけどねー」

ハヤテ君をからかって少しむくれてみせる。

「いいえ、僕は得意な一品料理しか作りませんからヒナギクさんは本当にすごいですよ」

につこりと笑いかけてくる。

「そ、そう・・・？」

「はい。本当ですよ」

「ありがと・・・」

恥ずかしいけどめっちゃくちゃ嬉しい。

「うわ、もう無くなっちゃった。ご馳走様です」

「早すぎよ。もうちよつとゆっくり味わって食べたらず」

「いやぁ、お弁当とか随分久しぶりだったんで嬉しくって」

ニコニコと笑うハヤテ君。

嬉しい。本当に嬉しい。

好きな人に褒められるってこんなに嬉しいんだ。

「そう言えばハヤテ君が一人って珍しいわね。ご主人様はどうしたの？」

お弁当を受け取りつつお茶を飲む彼に尋ねる。

「お嬢様は花菱さん達とポケモ○マスター決定戦をやるそうなのでお暇を頂いたんですよ」

「何やってるのよあの子たち・・・」

その頃のナギ達・・・

「はっはっは！私のリザードンは強いぞ！！」

「くっ、腹太鼓からタスキで猛火発動かつ！やるなナギちゃん！！」

「ふっ、やるな二人とも・・・」

「二人とも頑張れー」

「じゃあ今日は生徒会お休みなんですね」

「ええ、急に決まっちゃうからヒマでヒマで仕方なかったわよ」

お昼を食べ終わってから、ヒマな二人は雑談に興じる。

やっぱりハヤテ君とかとはちゃんと会話が成立するからいいなあ。

お姉ちゃんとかナギとかほとんど意味わかんないし。

そのとき近くの茂みに野球ボールが飛んできた。

「危ないですね。こんなところまで飛んでくるなんて」

「特大のホームランね。場所を考えたらファールかしら？」

「ですねえ」

茂みに転がるボールを拾い上げる。

「かいちよーすいませーん。投げてくれますかー？」

「はい、いくわよーっ！」

遠投の構えから思い切り相手の男子に向けて投げる。

「おわあ！？」

男子のグラブに吸い込まれるようにボールが収まる。

「ネットが無い場所でフルスイングしたらだめよー」

「すんませーん！」

「どうして遠投の構えで大した距離もない相手に投げるんですか・・・」

「いいじゃない別に」

呆然とするハヤテ君に軽く笑いかけてあげる。

「おーい、あつたー？」

「やつべー、会長に声かけられちゃったよ俺！」

「ああん！？俺がいつときゃよかったー！」

「お前が行ってたらあの借金執事に返されてたっつの」

「またアイツ？　いーよなーアイツばっか」

遠くで男子生徒が騒ぐ。

その声で一気に現実に戻される。

そう、結局は私は高嶺の花。

普通の生徒達にとっては違う世界の存在で、私と仲良くなろうとする人なんて居ない。

高校時代に一度でも声をかけてもらえるなら十分満足。

そんなだから友達も少ない。

切ない。どんどん切なくなってくる。

「ヒナギクさん・・・」

心配そうにこちらを見てくるハヤテ君。

本当は彼も私と一緒にいること自体が苦痛で、みんなから色々と言われるのが嫌で嫌で仕方無くて・・・

名前を呼んでくれればいつでも来るなんて約束しちゃったから仕方なく私に付き合ってるだけで・・・

「ねえ、ハヤテ君・・・私と居るの、イヤ？」

怖いけど、訊くしかない。イヤだけど、訊いておかないと。

これ以上スキな人に嫌われるなんてイヤだ。

「ヒナギクさん、顔を上げてください」

そんなことを言われて気づく。私が俯いていたことに。

「大丈夫です。ヒナギクさんは僕の大切な友達ですし、一緒にいるのが大好きですよ」

「ハヤテ君・・・」

「だから僕もヒナギクさんが泣いていたら悲しくなります。僕は皆さんのことなんて気にしませんから大丈夫ですよ」

「そっか、ごめん。私馬鹿だね・・・」

「いいえ、僕も小さな頃は友達いませんでしたから。白皇で友達がたくさん出来て嬉しかったんですよ」

「うん、うん・・・」

ハヤテ君はやっぱり優しい。

私なんかよりよっぽど辛いはずなのにすごく優しくて強い。

「ありがと、ハヤテ君」

「いえ、いつでも呼んでくださいね」

「ええ、そうするわ。そういえばそろそろナギ達を迎えに行かなくていいの？」

「あ、本当ですね。じゃあお先に失礼します」

一礼してから走り去るハヤテ君。

「ふう・・・」

走り去る彼を見送ってからベンチに座る。

「ハヤテ君か・・・」

随分と彼に依存していることに衝撃を受けた。

だってよく考えたら男の子の友達って彼だけなんだもん。

その後のナギ達・・・

「早く帰りますよ皆さん」

「ふっ、まだ決勝戦が残っているのにな・・・」

「行くぞナギちゃん・・・」

「分かりました。だったら僕に勝った方がポケオンマスターです」

「ふむ、大した自信だなハヤ太君」

「だねーハヤ太君」

「ええ、だって僕のマリ〇リは負けませんから」

数分後・・・

「〇リルリにタテられるとは・・・」

「まさかこんな近くにツワモノが・・・」

「あまいですよっ、お嬢様」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0402t/>

ハヤテのごとく！ 生徒会長の憂鬱

2011年10月6日16時32分発行